

色あせたデコイ

「刑事さん、わたし今度の罪は何ですか」

馬場駿

一

菜美の目には水そのものが岩肌を滑って楽しんでいるように見えた。苔生した岩にぶつかると急に泡をふいてそこに小さな渦をつくる。結局後ろから押されて流れにもどるのだが、そのときのちょっとした躊躇いにおかしみがあった。

堀の中に二年もいた。

出所する前の日に大雨が降った。側溝が溢れて雨水が走り堀の角で音を立てて地中に吸い込まれた。渡り廊下で菜美は飽きもせずそれを見て涙が止まらなかった。

いまもまた水を見ている。
「実際に上流に行って見て来なよ。お客さんに勧めるのにも説得力が違ってくるから」

江尻の言葉は本当だった。菜美は川の水を口に含みながら来て良かったと心から思った。満開の尾花に顔を撫でられながら迂回して係留を見渡せる大岩の上に出た。

河原の石は輝くように白く、やや傾きかけた陽射しが創るその影は黒というよりは濃い紫に近かった。両脇の切り立った崖の紅葉は地色の深緑や茶色よりやや明るく淡く彩の季節を待つかのように大人しくしている。目を凝らすと彼方に一筋の垂水が見える。

「白い糸のように見えるだけでなくて、滝の音が聞こえるところまで近づくんだ」

また思い出した江尻の言葉に「もうだめ、限界」と応えて菜美は大岩の上に寝転んだ。心臓の鼓動が足の爪先まで届いている。目を閉じると朱色の世界が広がった。臉を流れている血が透けて見えるらしい。「江尻さん」と口に出して呼んでみた。甘酸っぱいものが胸にひろがった。

何日か前、親切にしてくれる江尻を訝しんで直截にそのわけを聞いてみた。

「おい、普通聞くか？ 中学生じゃあるまいし」

江尻が笑いながらそう言った後で、急に声の調子を変えて囁いた。「俺もそうだから言うんだけどな、お前、人の血で手を汚したことがあるだろ」

菜美の心はこのときから江尻を追いかけだした。色恋とは違うよ

うな気がする。なんとなく安心感があるのだ。一番隠しておきたい部分を真っ先に知られてしまったからだろうか。しかも江尻はその後一切穿鑿をしてこなかった。「話したいんなら聞いてやるよ」そう言って微笑しただけだった。

ただ忠告だけはして来た。

「親父や女将には言うなよ、あの二人はごく普通の人なんだから」もちろん言えるわけがない。言えばやっとな手にした職と住処を一挙に失うことになる。

江尻のさりげない配慮に刺激を受け続け、このごろでは自分から江尻の気を引こうとしている。勧められるままにこの溪谷に来たこともその一つだった。

菜美は時計を見てからゆっくりと立ち上がった。

「あら、早かったじゃない」

民宿デコイに戻るとすぐに女将の多佳子に声を掛けられた。勤務中に出掛けたのだが別に怒っている様子はない。

「ほとんど車ですから」

菜美は往復二十キロの林道を歩かずに軽トラックで走っている。考えてみればこれも民宿の負担だった。

「いいわね、運転できるって」

「必需品という感じですよ、免許も車も。都会にいとそれほどじゃないんですけど」

「私なんか歩いてもこれだしね」と、多佳子が引き摺りぎみの左足を叩いてみせた。

「捻挫でしょ、痛いんですよ」

菜美は民宿に来た時からそう思っていた。

「そうならいいんですけど」

違うなら何なのか、さすがにそこまでは訊けない。

「あの、急いで板場に行っておかみさんの分まで働きますから」と、急に沈んだ多佳子にとまどって菜美は後退りをした。それでなくとも遊んできたという負い目がある。

「いいわよ、気を遣わなくても」

「でも、大自然に触れちゃって何だかエネルギーたっぷり」

「気持ちだけいただいておくわ、実は今日のお客さんグループ、キヤンセルなの、だからゼロ」

「じゃ、板さん、それでわたしを」

特別な意味はなかったのかと、菜美はがっかりした。

「あら、そうだったの」

多佳子が菜美の顔をからかうようにして覗き込んだ。手を小さく振って慌てて否定する菜美。

「安心なさい、キャンセルは小一時間前のことよ。五人のご家族だつただけ、何でもご主人に突然仕事が入ったとかで」

「どうやら菜美を溪谷に行かせたのはやはり江尻の好意かららしい。「キャンセル料とれますね、それだと」

菜美は一呼吸を挟んで事務的な話題へと切り換えた。

「ほしいわよ、わたしは。だけど主人が全然請求しないのよ、こういうとき」

「旦那さん、優しいから」

「その優しさが経営の敵なんだけど」

多佳子の顔が少しく曇った。

決して美人ではない。正直に言えばくすんでいる。化粧もしていないのだ。女将と言えば旅館の顔だが民宿では違うのだろうか。客の入りや経営を云々する前にするべきことがあるような気がする。むろん口が裂けてもそんなことは言えない。それどころか菜美自身も化粧をやめた。目立つことはこの場合危険だということを菜美は知っている。女の嫉妬ほど怖いものはない。

菜美の部屋は「東一号室」つまり客室だ。別に優遇されたことではない。それが出来るほどに客室稼働率が低く空き部屋が多いのだ。何かのときは二十四時間いつでも使えるということかもしれない。本来の宿舎は林の中を百五十メートルも行った先で、住込み従業員が菜美しかいなかった今では、不便なだけでなく不用心でもあった。だから菜美の方にも利点がないわけではない。

九月に入って何回目かの予約ゼロの日のこと、部屋に居ると「おい、居るか」と聞きなれた野太い声があった。

ドアを開けると江尻が缶ビールを抱えている。

「誤解するなよな、下心はないからな、これでも女房子供を愛しているんだから」

江尻はそう言うとニヤッと笑った。

たしかに弱みは握られている。恩に着せられて下心を行動に移されたら抗しきれないような気がした。もっとも菜美はそういう出方をする男なら許さない気であるが。

江尻が目が入っていいかと訊いている。

「散らかってるけどどうぞ」

菜美は江尻の男の部分を意識している自分を否定したくなって、ドアを大きく開けた。

「無理するなって」と江尻が鼻先で笑った。

また胸が騒いだ。確かに好意は持っているが、色男ぶられるのは厭だった。

「散らかすほど荷物ないくせに」

「ああ、そうよ、見栄、見栄」

そういう意味かと内心苦笑した。男の体に触れなくなって久しい。同じ部屋に男がいるというだけで自然に咽喉が乾いた。

そんな菜美にはおかまいなしに江尻は、胡坐すると一人でまくしたてた。退職するという。

「この親父には恩義があるんだけど」

二人目の子どもが産まれるのにこのままでは将来が不安だという。「本当は奥さんが原因なんですよ」

そんな気がした。何日か前に江尻と裏の牧場へ行ったことがあるその時に擦れ違った郵便配達員の意味ありげな笑いが気になっていたので。

「俺も正直だから感づかれるよな」

江尻も菜美にたいして特別の想いがあった。だからこそ黙って去らずに説明に来たのだろう。

「それにここ、危ないし」

「言わないで、江尻さんの口から聞きたくない。そういうの、黙っている人だと思う」

「かいかぶるなよ、半端に生きてるただの前科者だ」

江尻が自嘲気味に言った。

菜美の目に涙が溜まってきた。

「そうだったな、悪かった」

江尻は煙草をくわえて黙り込んだ。

二人が同じような傷口をそれぞれの想いで見詰めている。そんな時間が流れた。

「ビール、飲んでいい？」

菜美が先に口を開いた。

江尻は返事の代わりに缶ビールを二つ手にして開けた。

「俺の場合、今の女房の兄貴を刺しちまって」

「やめて、訊きたくない」

菜美は耳を塞ぐと頭を振った。

「今でも庖丁を持つと時々震えがくる」

菜美は身を固くした、何か叫んだような気がする。忌まわしい過去が鮮明によみがえったのだ。

「返して！ あのお金作るのにどれだけ苦労したと思ってるの！」
無数の雨粒が男の足元で撥ねていた。

倒れながらも必死で左脚にしがみつく菜美を、男が自由な右脚で蹴り続ける。

「苦労だあ、笑わせるな、トラックの中で誰彼かまわず男と寝て稼いだ金じゃねえか、聞いたぞ、金目当てじゃなくて誰がお前みたい

な女と結婚するか」

頭から出た血が雨に流されて菜美の目に入る。菜美は逃げようとする男の足を思い切り払った。ゴンという鈍い音がして男が動かなくなった。

側溝の水がゴボゴボと鳴っていた。

「それで金は？」

江尻が静かに訊いた。どうやら菜美は江尻の話を止めて自分のことを喋っていたらしい。

菜美は首を振った。その時は既に借金の弁済という形で使いこまれた後だったのだ。

「それにしても八年で千五百万とは貯めたねえ、殺したくなるわな、それを盗られりゃ」

江尻は自分のことのように深いため息をついた。

「そういう女なの、わたし」

江尻のイメージを壊したくなかったのか、先に話すことで江尻と同じ世界に自分を置きたかったのかは分からない。いずれにせよ、それは無意識に近かった。そういう女だと伝えればいい、それだけだったのかもしれない。そうだとすれば江尻の欲情を誘ったことになる。

「男の名前も言わなかったな」

そうとう長い時間話していたはずだが、確かに前夫の名前は言っていない。さすがに気になったらしい。

「思い出せないの」

嘘ではなかった。忘れようと意識して消している。

「その男のこと、まだ先があるだろ」

江尻が菜美の目をジッと見た。

「今の話だけなら最悪でも執行猶予がつくはずだ。脚が絡んだのなら過失致死だし、蹴って倒したとしても傷害致死だ。俺自身弁護士にいろいろ訊いたからそれくらいは判る。事情が事情ってこともある」

「転がして横のドブに落としたわ」

溺死、それが直接の死因だった。殺意は微妙だったが、未必の故意ながら有るとされた。

「やっばりな」

江尻がギリッと歯を鳴らした。

「江尻さん、まだ菜美さんの部屋に居るのかしら」

多佳子が管理棟の方へ行ったかと思うとすぐに戻って来てそう言った。

民宿デコイの管理棟はカナディアンログハウスであり、食堂とロビーがある。その東西に宿泊棟が延びそれぞれが五部屋に別れている。板場は管理等の後ろに付き、短い渡り廊下でオーナー宅に繋がっている。いま多佳子と主の雄大が居る所はそこである。

「なんだ、部屋まで見に行ったんじゃないのか」、
雄大はあきれ顔で言った。

「いやですよ、妬いてるみたいで」

「誰に」と彫刻刀を持つ手を止めて雄大は睨んだ。

「誰に」と彫刻刀を持つ手を止めて雄大は睨んだ。誰にかけるなんて」

雄大は時計を見た。午後十時だった。多佳子を見ると茶筒に急須の蓋を載せている。

「多佳子何してる、茶筒、茶筒」

「あらやだ」

「言っとくけど菜美さんは三十だぞ」

雄大はデコイを彫るのをやめて木屑を払うと卓袱台の方へ這った。

「江尻さんの心配をしてるんですよ、奥さんも子どももいるし。菜美さんもあれでなかなか」

「ふん、心配してやっても他人が困っているときにハイサヨナラだ。傷害事件を起こしたとき、就職先が見つからないって泣いて頭を下げてきたのを忘れたのか」

「ちよつと、あなたらしくないわよ。それに江尻さんだって生活あるんだし」

「どうせ僕の所為だと言うんだろ」

雄大は一気にもう冷めきっているお茶を飲み干した。

「わたしだって奥さんがお腹大きくなきゃそんなに心配しないけど、ほら、こういうとき男の人って、我慢できなくて浮気するっていうじゃない」

「いいかげんにしろ」

雄大は横を向いた、よその夫婦の性生活にくちばしを挟める多佳子ではない。

多佳子も怒りの意味を理解したらしく黙って俯いた。

「それより当分板前は入れないからそのつもりで」

雄大は自分に言い聞かせるような口調で言った。
「ええっ！」と多佳子が顔を上げた。

多佳子が驚くのも無理はない。板前のいない民宿はたしかにあるが、その場合はないがい経営者自身が板前か調理経験者だ。自分がそのいずれでもないことは誰よりも雄大自身がよく知っている。

「まさかあなたが？」

「三人でやる、それしかないんだ」

「三人て？」

「僕と君と菜美さんに決まってるだろうが！」

珍しく苛立ちが表に出た。板前にまで見捨てられる経営状態。それを何とか立て直さなくてはならないのだ。

「辞めちゃうわよ、菜美さんも」

多佳子が肩を落とした。

「いや、それはない」

こんな田舎に、こんなちっぽけな民宿に、居る必要があるから居るのだ。理由は分からないが、そもそも自由な選択ができるとしたら菜美はここには来なかった。雄大はそう思っている。

江尻が出て行く前に板場を綺麗にしていくというので菜美も終日手伝いをした。

板前の世界では「やめる」と言わずに「あがる」と言うそうで、その時の礼儀であり常識だという。もちろん大勢の中から抜けていく際は別だろうが、その時は自分の持ち場と言い換えればいいことだ。

二人は前夜と違って兄妹のようになっていた。はしゃぎまわる二人を気にして多佳子が覗きに來たほどだった。

油污れの難物であるガス台、排気ファン、レンジフードが磨き終わるとそれも終り、とうとう別れが來た。

「もう行くの」と菜美は江尻の白衣を引いた。

「何だか変な関係だったな」と江尻。

結局男と女の関係にはならなかった。その気がなかったと言えは嘘になる。ただ、キズの共有だけで結ばれるには抵抗があった。哀し過ぎる。菜美はそう思ったのだ。

二人は抱擁とキスだけで夜を終わらせている。

「元気だね」

「お前もな。それと、アドバイスしたことを忘れるなよ。親父も女将もお前を頼るしかないんだ。相談されたらお前の意見として言うてくれ、俺の名前を出すと親父は意地になるだろうからな」

江尻の配慮を菜美は本物だと思った。

「江尻さんてやっぱいい人なんだ」

「からかうな、バカ」

「もしかしたらここ辞めるの、デコイを潰さないためじゃないの」

江尻が驚いたような顔をした。

「板前の給料高いからな」

「うん、それもあるんじゃないかって、何となく」

江尻が丸椅子に座るようにと勧めて「菜美」と静かに言った。

呼び捨てが嬉しかった。

「どんなときでも給料だけはちゃんともらえよ。そうしないと知ら

「ず知らずのうちに対等でいられなくなる」

「俺も菜美もオーナーじゃないってこと」

「それくらい」分かる」と菜美は内心ムツとした。

「バカにしたんじゃない。誤解するな」

江尻が手で菜美を制して言った。

「いまに解かるよ。それより菜美、お前化粧したほうがいい、折角の顔が可哀相だ」

「それ、ほめてるの」

「ああ。素直にとればな」

江尻はいたずらっぽく笑って頭を搔いてみせた。

菜美は多佳子との関係を考えてのことだと、多少得意げに解説をした。

「ちよっといただけじゃない優越感だな」

「ひどいな」

「いいからお前が先に綺麗にしろって。そうすれば女将も化粧をしてお客の前に出るようになるから」

利用客に対しても今のままでは失礼だと江尻は付け加えた。それは菜美も同感だったが。

「この際、後ろ向きに対抗心は捨てる、な？」そう助言を締めると江尻は、後で無造作に束ねただけの菜美の髪をそつとなぜた。

「もう少し、辞めるのを先にしない？」

菜美は無理を承知で口にしてみた。他に自分の気持ちを表す言葉が見つからなかった。

「たまには遊びに来るよ、今度のところ車で二十分ぐらいだし」

「なんだ、もう決まってるんだ」

「お盆に誘いがあった。ここ夏でも半分の入りで見込みないし、条件も当然上だったし」

一と月前に行き先が決まっていた。所帯持ちとしては当然と言えば当然なのだが、菜美の心は急激に冷えた。職を辞し経済的な不安の中に自分を置く。そうならデコイに対する忠告やオーナーに対する配慮は美しい。しかし早々と安全な場所を確保してのそれらは、それこそ「ただだけない優越感」でしかない。そう思った。

「そういうことか」

それを前提に江尻の最後の訪問を思い起こしてみると、その目的自体が怪しくなる。菜美ははっきりさせたい衝動にかられた。

「最初から抱くつもりで来たんだ？」

「まあな」

まだその気はある。江尻がそう言いたげな笑みを浮かべた。

「自信はあったよ、菜美が女将に連れられてきた時からその気でいたし」

菜美は不快感をあらわにして顔を歪めた。江尻もまたその種の男だった。一時でも違うと思った自分が情けなかった。

「お義兄さんをなんだとかいう話も嘘なわけ」

菜美の口調が攻撃的になった。

「それは違う、嘘じゃないって。ここの親父に訊いてもらえば解かる」

江尻は菜美の変化によく気づいたらしく慌てた。

「もういいわよ、どっちでも」

菜美は一気に心の距離を広げにかかった。この後も江尻はしゃべり続けたが、ほとんど聞いていなかった。ただ、その中で一つだけ心を突いた言葉がある。

「負い目と憎しみで繋がっている夫婦」

江尻の夫婦がそうだという。

菜美も同じだった。或る意味では夫を殺してしまったいまでも。それを償ったいまでも。

「それでも子どもが出来るんだから残酷よね」

菜美は江尻にそう言ったような気がする。

「君もそうしたいのか」

雄大はやつとの思いで口を開いた。

多佳子の義弟の宮本隆が民宿デコイを買い取りたいと言ってきた。それが多佳子の実家の総意だという。

「もちろん沢登さんも義姉さんも居てもらっていいんです。ただ今まで通りの経営ではどうにもなりませんのでこちらの方針に沿っていただくことになりましたが」

速い話がオーナーの地位から下りて一従業員として働けということになる。

宮本はさらに、それが多佳子のために最良のみちだとさえ言い切った。

俯いて何ら応えないことで肯定している多佳子を見て、雄大はようやく察した。

「そうか、君から頼んだのか」

「だって板前さんの真似なんてできないでしょう」

多佳子がそう言って顔を上げた。

「今居る従業員の給料も払えないって話だし」と、宮本も両足を投げ出すようにして言った。バカにすることで既に立場が違うと決めつけている。

雄大は宮本をではなく多佳子を睨みながら「そのくらい腹が出ていると畳に座っているのも大変だろうね、遠慮せずそのままどうぞ」と斜ななめの方向に皮肉を飛ばした。

「この状態を知っているのかな？ 彼女」

「まだ一度も払っていない段階でその必要があるのか」

「僕から言いましょうか」

「余計なことをするな、まだ僕のものなんだぞ、ここは！」

「あなた」と、多佳子が注意を促した。菜美が家の周りを掃いている。うっかり聞かれてしまわないとも限らない

「菜美さんは多佳子が連れて来て多佳子のために入れたんだ、そうである以上客の入りには関係ない、今でも必要なんだ。そうじゃないのか」

雄大は多佳子に向きなおって迫った。

「確かに他の従業員は誰一人いないわなあ」

宮本は脚を胡坐に戻すと、眼鏡の真ん中をツンと指で突いて鼻に皺を寄せた。

「実家がオーナーと言っても生活そのものは変わらないんだし。どお？」

多佳子が訴えるような目をして言った。「菜美さんにも居てもらえるし」と、付け加えることも忘れない。

毎日の生活が変わらなければそれでいいというのは女の発想だ。

雄大はそう思った。

確かに多佳子には好条件だろう。集客の心配も資金繰りの苦労もない。給料とりの生活に戻るのだから家計はむしろ安定する。よそでは絶対不採用になるだろう足の故障も実家の両親がオーナーになるというのだから問題にならない。しかも雄大とも一緒に働けるというのだ。ただ、と雄大は訝る、それは最初の約束がいつまでも守られればという話だと：

腕組みをして唸る雄大を見て多佳子は溜息をついた。

「沢登さん、誤解しないでくださいよ、乗っ取りじゃないんです。助きたい。社長の気持ちはそこにあるんです。もちろん僕もです」

多佳子の実家の木村家は代々続いた造り酒屋で、今では中堅の酒造会社にまで成長している。雄大の目の前で大見得をきった宮本は、多佳子の妹と結婚して事実上木村家の婿になった男で、肩書は一応専務取締役ということになっている。

「じゃあ、助けてもらうよ」

雄大は腕組みを解くと微笑しながらそう言った。

「あなたありがとう」

「それがいいって、よく決心してくれました」

宮本と多佳子が肩を叩き合って喜んだ。

「二百万ほど貸してくれ」

当面はそれだけでいいと雄大は胸を張った。

宮本が一旦開けた口をパクツと閉じて黙った。

小さな沢を覗き込むと、菜美の顔がシルエットになった。それほど空が輝くように明るい。幅一メートルほどの流れには水音すら厭う静かさがあった。水辺の草草がそれぞれの葉の先を流れに浸けて、規則的にお辞儀を繰り返している。やや前方に花崗岩の大岩がせり出しているが、その下に土が削られてできた幅広い穴が見える。菜美は目を凝らした。何か魚が隠れ棲んでいそうなのだ。枯れた篠竹の葉が何枚か折り重なって沈んでいる。菜美が焦点を合わせたそのポイントに黄ばんだ山桜の葉が落ちてきた。そのとき、その辺りの砂が少しだが舞った。ヤマメだ。菜美は瞬きも忘れてその姿を追った。現れたヤマメは沢の上流に頭を向けて、悠然と、止まったままで尾鰭を動かしている。

「初めてですか、ヤマメ」

しわがれた声に驚いて菜美はその場で跳ね起きた。

「あ、逃げちゃいましたね」

見るとヤマメの姿はなく、山桜の葉が小舟のように動き出した。

「この先の別荘に住んでいる大和田と言います」

犬を連れたその男が、すまなそうな顔で自己紹介をした。少し酒臭かった。

菜美は仕方なく会釈をした。

「あんまり夢中で見てるから声を掛けにくくてね」

じゃあ掛けるなよ、と心の中で声にして胸を押さえた。鼓動がやや激しい。

男は自分が名乗った以上当然女がそれに応じるだろうと待っている様子だった。

「沢登さんとこのアルバイトでしょ」

「ええ、水野菜美です」

仕方がないので名乗った、後でデコイが悪く言われても困る。

「まあ、無理もないよね」

人っ子ひとり居ない山中の沢で突然犬と男が出てきたのだからと、男は先回りをして菜美の非礼を許した。

「失礼をしました」

こうなると謝らざるを得なくなる。菜美は警戒心を強めた、男は何を期待していたのかと。

「参ったな、話が挨拶から先に進まないよ」

菜美にしてみれば、夢を見ながら眠っていたところを急にベッドカバーを取り去られたようなものだ。恥ずかしさと腹ただしさでそれどころではない。

「とてもいい景色だった」

男は菜美の頭の天辺から爪先までを舐めるようにして見た。

「人間と自然がこれほどまでに美しく合体しているのを見たことがない」

菜美は背中に寒気を感じて「わたし、そろそろ休憩時間終わりですから」と逃げに入った。わけの分からない男に付き合う謂われはない。

初老らしき男に背を向けると、道らしい道をめざして足早に歩き出した。

「デコイでまた会いましょう。気を付けて。ここはあなたのような女性の少ない所だから」

男が後ろから犬と一緒にになって吠えた。

あなたのような女性。菜美はその言葉の響きに何か嫌なものを感じた。

「菜美さん、スーパーまでお願い」

菜美が休憩から戻るとすぐに多佳子が寄って来て言った。

「はい、じゃあ車で待っていますから」

「すぐに悪いけど、あなたは仕度しない方がいいの？」

「ええ、私はこのままですが」

「ああ、わたし？ ただのお使いだからこのままよ」

菜美は驚いた。ノーメイクはいつものことだが、髪がボサボサなのだ。膝が丸くとび出したトレーナーはゴムも緩いらしく、だらしなく膨れた下腹部がはみ出て、立ち姿をより醜くしている。

「軽トラですか、マイクロですか」

一応聞いてみた、格好からみれば軽トラになるが。

「きょうはマイクロにして。お天気が気になるから」

違った。菜美は真っ青に見える空を仰いだ。

「あの山ね、三千メートルに近いんだけど、ああいう雲がかかっているときはアツという間に雨になるの」

「こんなに晴れているのに？ 信じられない」

菜美は感心してみせた。

デコイから最寄りのスーパーマーケットまでは約八キロの道のりだ。途中田圃に降りるまではキューカーブが三キロほど続く。

多佳子の体がすぐ後ろのシートで大きく揺れているのがルームミラーで見て分かる。

「菜美さんの運転男っぽいわね」

「それ褒めてます？ 女将さん」

「もちろんよ、わたしみたいに運動神経切れちゃった女から見ると羨ましくて」

「わたし、四トンのロングに乗っていたことがあるんです」
「もしかしたら、あれ？ 夜中に国道を走ってる大きいやつ」
「はい。ロングボディって大型トラックに近いんですけど、そうそう、シートの後ろに仮眠スペースがあるタイプでした、どんな感じが分かります？」
「見たわよ、映画かテレビドラマで、とにかく菜美さんて偉いわ、若くて、綺麗で、体力もあって、いろいろ出来て」
「照れちゃうわ、まいったな、それにその若いつて時季、とっくに過ぎてます」
「違うのよ、単純な年齢じゃなくて、例えば私は四十五だけど、もう六十の域よね、心の輝きって言うのかしら、そういう物差しで見ると」
「あの、六十はちょっと」
その通りだが、ここは否定するのが礼儀だと思った。
「ご主人まだ若いし、女将さんだってもう少し」
しまったと思ったが、遅かった。
「きれいにしていたらって言うんでしょ」
「あ、いえ。困ったな」
「いいのよ、自分で分かっているから」
菜美は心の中で舌打ちをした。長めの会話はこれだから怖い。案の定沈黙が二人の間にやってきた。
「雄大が可哀相って解かっているから、お化粧なんてできないし」と多佳子が急に不思議な言葉を吐いた。
「え？ 女将さん、いま。え？」
菜美は最後の急カーブを曲がり切ってからルームミラーを見た。そのとたん「うそ」と、うっかり口にしそうになった。
多佳子の目が涙で光っている。ここは一旦、言葉を仕舞おう。菜美はそう思った。
「江尻さん、変なことしなかった？」
スーパーマーケットの駐車場に着くと多佳子が言った。
「そんな仲じゃありませんから」
菜美は即座に否定した。今はもう疑われるだけでも嫌になる。
多佳子によれば、以前アルバイトの女子学生が二人も江尻が原因で、短期間のうちに辞めたという。
「それがね、菜美さんのときみたいに夜部屋に行ったのよ」
しかも料理を間違えたとか、落としてダメにしたとか失敗したときを狙ってだという。
「まさか？」そこまで下卑た人間だとは思いたくないが女には結構だらしがないような気がする。
「やっぱり夏江さんとの夫婦生活、うまくいかないのかしら」

どうしても江尻が何かしたと思いたいらしい。或いは菜美が誘ったと思いたいのか。いずれにせよ、多佳子の意外な一面を見たような気がした。

「奥さんのお兄さんを刺したって本当ですか」

話題を性的なものから切り離そうとして菜美は訊いてみた。

「そういう危ない話もしたの、江尻さん」

少し驚いた様子の多佳子によれば、同時に二、三人の女を相手にしていた江尻に夏江の兄が喧嘩腰で詰め寄ったのが事件の発端だという。その兄に瀕死の重傷を負わせ身体障害者にしてしまった江尻は夏江の親代わりを奪ったに等しく、結婚する以外責任の取りようがなくなったらしい。つまり一生をかけて償うということである。

「彼の方から話し出したの？」

「はい」と答えるしかなかった。

「じゃ、菜美さんには本気だったのかな」

「ほんのいたずらでしょ、きつと、色男の」

菜美はトゲのある言葉でこの話題に終止符を打った。

夕方には雨になった。多佳子の予想より三時間ほど遅れたことになる。午後十一時、その雨が激しさを増している。菜美は客用の風呂に浸かっていた。いくつも風呂を沸かすのは不経済だからだ。この地で暮らすようになってから静かさにも音があることを知った。いまでもその音が聞こえている。乳白色の湯気が浴室内に満ち少しく漂っている。白い闇、そんな感じだった。

菜美は小ぶりだが形のいい乳房を両掌で支えてみた。何人の男の手が触れただろうか。塀の中では古手の女囚にまで触られている。菜美は或るとき思ったものだ。男とか女とか性が重要なのではなく、自分以外の肉体に触れることに意味があるのではないかと。人はそうすることで確かめている。見えない自分の「体」と見えない相手の心と、見えているはずの自分の心までも、と。

いつもではないが、この日は最後の利用者が浴槽の栓を抜くことになっていった。だから文字通りの仕舞湯になった。

菜美は江尻の決断を思った。江尻が夏枝の体に触れて確かめているものは想像するだけで戦慄に値する。体中に棘が刺さったようで狂うほどに痛い。

菜美は栓の鎖を引いた。湯が小さな渦を巻いて排水されていく様子を見つづけ、ゴボゴボという最後の水音を身を縮めながら聞いた。何がどうなのかよく分からないが涙が自然に溢れ出た。

脱衣場に出ると湯気が菜美に抱きつくようにして追ってきた。

「あ、ごめん」

入口のドアが開く音と声がほとんど同時だった。

「浴槽を洗おうと思って」

雄大が弁解をしつつ立ったままにいる

「明日の予約があつて、それで：」

まだ目を逸らさないでいる。

菜美もまた男の前に全てを晒したままにいる。

湯気だけが菜美の裸体を隠そうとするかのように激しく動いていた。

宮本が帰ってから三日後、雄大の預金口座に合計二百万の金が振り込まれた。

雄大はこの借入金がある間に善後策を講じなければならぬ。客の数で言えば月々百万で夫婦は食っていける。一日平均四人でいいのだ。問題は人件費だった。土地建物の借賃といった負担がない分、楽と言えば楽なのだが、それが却って背水の陣を布けない弱みにもなっていた。しかも何故か金融機関は金を貸さない。今回も宮本が口で失敗してくれなかったらどうなっていたことか。

雄大はとりあえず地元の調理師会に出掛けて半日だけ板前を回してもらうことにした。もちろん予約客がいらない日は要らない。そんな我が儘が通る可能性は低いが頼んでみるしかなかった。

「多佳子、菜美さんにこれ」と雄大は給料袋を突き出した。

「もう五日遅れよね」

「何か言ってたか」

「ううん、食べて寝ていられる環境だから遅れても平気だって。」

軌道に乗るまで頑張りましょうって」

「情けなくなるな、それを聞くと」

「いい人拾ったわ」

多佳子がそう言った後で急に思い出し笑いをした。

「何だ、気持ち悪いな」

「駅でうずくまっていたからおなか痛いので聞いたのよ、あの日」

「うん、君にしてはヒットだ」

「何か感じるものがあつたのよ、不思議だわ」

「腹が減って動けなかったんだっけ？」

「本人がそう言ってた、一週間ぐらい経ってからだけど」

「とにかく渡して来いよ」

雄大は笑いながら言った。

「今回はあなたからの方がいいんじゃない」

「いや、女は女同士だから、君から」

雄大は菜美の裸を見てしまったことに拘っていた。あの夜、いけないとは思いつつも体も硬直してしまった。仄暗い脱衣場に浮き上がるようにして見えた淡いピンク色の肌が目に焼き付いている。

不思議なのは菜美だった、何処を隠すでもなく騒ぐでもなく、まるで自分の体を誇示するかのよう立っていた。潤んだ瞳も何かを挑発しているようで。いや、そう見えたに過ぎないのかもしれないのだが。とにかくその「誘惑」にのるか否かの心の葛藤が動けなかった原因かもしれない。

「変な人、遅れたから格好悪いんでしょ」

多佳子が小さく笑いながら出て行った。

雄大は煙草に火を点けた。

「どう思ったかな、彼女」

紫煙がいつになく目に沁みた。

不惑を越えて何年か経った程度だが性的には事実上老境に入っている。今まではそれも仕方ないことだと思っていた。

そう、あの日から――

沈む夕日に呼びかけた自分、青空を行く雲に手を振った自分。川の流れに顔を浸けて小さな魚と遊んだ自分。デコイを水面に浮かべ鴨の飛来を待つときの張りつめた自分。襟垢の濃さを競い野生児を気取った自分。それらの全てをあの日に失った。

「よせ、危ないから放せ」

魔が差したとしか言いようがない。猟銃に散弾を装填していたのだ。雄大は部屋の中で鴨の剥製を畳の上に置き銃口を向けていた。ちよつとした、自分への戯れだった。そのとき、多佳子が血相を変えて飛び込んできた。二人で買物に行く約束を反故にした直後だった。多佳子はヒステリックにわめいた後で猟銃に組み付いてきた。たぶん多佳子にとって猟銃は憎い女だったのだろう。

「鴨、鴨って、じつは髪の毛の長い女じゃないの。撃つのだって猟銃なんだか何だか！」

必死な女の力は負い目のある男のそれを凌ぐ、多佳子は力任せに猟銃を引ったくった。同時に暴発。以後、多佳子は心の病人に、雄大は心の老人になる。

散弾を摘出するために長時間を要した手術が終り、多佳子は助かった。しかしこの事件は地方公務員だった二人を同時に窮地に陥れる、刑罰と失職と心無い噂と。二人は雄大が相続した高原の土地にある戸建に移り住むことになった。

あれから五年、二人に性生活は無い。多佳子は下半身の傷痕が無意識に雄大を拒絶するのだろう、無理に挑めば目の前で嘔吐を繰り返した。

雄大が剥製の鴨を捨て、鴨猟の囿に使うデコイを彫りだしたのはそのころである。

「こんにちは、沢登さん」という声に我に還った。見ると縁側から見慣れた顔が覗いている。

「どうぞ、開きますよ」

雄大は訪ねてきた大和田を好かない。元新聞記者を鼻にかけるところまでは許せるのだが、無類の噂好きなのだ。しかもそのほとんどが根も葉もない中傷の類だった。

「菜美さん、元氣ですか」

その大和田が菜美の名を口にした。油断できない。

「え、ええ、よく働いてくれています」

他に言いようがなかった。

「この前、胡桃沢で偶然会いましたね」

偶然以外あってたまるかと思った。

「ああ、あのヤマメのいる」

「僕みたいなヤモメもいますよ」と、笑えないギャグを飛ばす大和田はかなり上機嫌だった。

「うなずけました、いい女だ」

何がうなずけたのかと雄大は訊いた。菜美のことなので少しは話に付き合える。

「局の山田から江尻とできてると聞いてたからなるほどと思ってね。あの板前は、あれでなかなかの面食いだっただから」

「そういう噂をふりまいていいのかねえ、いくら臨時の配達員でも」雄大は呆れてやや大げさな口調で言った。

「まあ、こんな田舎だから」

場所云々ではなく人間の質の問題だと首を振った。「不愉快だな、うちとしては」そう言わざるを得ない。

大和田が意味ありげな笑い方をした。

「何か今、失礼でもしたのかな」

「沢登さんもその気じゃないの」

「その気って何が」

「誰とでもそうなりそうじゃないか、彼女の雰囲気。清潔な衣の下に淫乱な体がちらりって感じの」

雄大はたまらずプイッと横を向いた。

「そういうところ、いいなあ、遊んでいるようで案外純情なんだから。じゃあ、立候補はやめますよね？」

「菜美さんはそういう人じゃない。だいいち大和田さん、あなた、一体何を」

何をしに来たのかと言いかけてやめた。ムキになればなるほど、心の中を見透かされそうな気がしたのだ。

大和田にはそういう不無気味さがある。

江尻のことを話し合ってから、多佳子とは急に打ち解けた感じになった。そしてこの日も菜美は、多佳子に特別に呼ばれた。

ログハウス二階の談話室は、現在多佳子の私室になっている。空を四角く切り取ってそのまま天井に貼り付けたような採光装置。周りを煉瓦で囲った鑄鉄製のストープ。白くて素直そうな材質の大きな木製テーブル。その上には色とりどりの野草の鉢がならんでいた。「ここ、初めてです、わたし」

多佳子に秘蔵の押し花の数々を見せられた菜美は、それらの美しさに目をみはった。

「あなたもやってみない？」

「できるかしら」

「意外と簡単よ、それに花の名前憶えられるから楽しいし」

「名前、全然だめです、わたし」

「例えば道端で男の子に出合ったとき、その子の名前知ってるのと同じじゃないのと同じや親しみがちがうじゃない。後で話題にするときも。野草だって同じよ」

多佳子は弾んだ声で言った。

菜美は押し花にする予定らしい花の一つを手にとった。花卉が元までけた形の紫色の花で、先の方が少し捻じれている。

「シデシャジン、桔梗の仲間よ」

「なんだかお坊さんがヨーガの修行しているみたいなの」

「ええっ、私には分からない世界ね、そういうの。菜美さんて面白い」

多佳子が白い歯を見せて笑った。

綺麗な人だったのかもしれない。菜美はそう思った。

「女将さん、これは？」

鐘の形をした青紫色の花を菜美は選び出した。

「ふつうツリガネニンジンていうわね。わたしは別名のトトキって名前の方が好きなんですけど。好きっていえばこれもキキョウ科、菜美さん、もしかしたら桔梗好き？」

「というより紫系が好きなんです」

「そう。わたしは赤かな、それもちょっとピンクっぽい。野草で言うとタチフウロなんか最高ね、その棚の右端にあるから見てみて、菜美さん」

何度も名前で呼びかける人は寂しがりやだと聞いたことがある。

そう言えば多佳子は、はしゃいでいてもどこかに無理がある。多佳子が居て影ができるはずなのに、話をしていると急に影の後ろに多佳子が隠れてしまう。そんな感じがするときが度々あった。

菜美は言われるままにその花を手にした。

「もう咲いていないかも。この辺り標高八百超えてるでしょ、秋が深まるのが早いよ」

まるで別人のように見えた。摘んできた野草をてきばきと種分け

していく多佳子にはくすみが無い。
「これだけ摘むのって大変でしょ」

脚が悪い多佳子なのだから。

「引きずるし重いものも駄目だけどお花摘んでくるぐらいは大丈夫。それに歩かないとどんどん退化していくらしいから」

「生きてる花っていいですね」

テーブルの上の野草をいくつか手にした菜美は、このとき多佳子が自分の影を意識したことに気付かなかった。

「わたし、ドライフラワーって何となく嫌いでした」

そういう意味で言ったつもりだった。

「興味はあったけど市販のお花って高いから」

多佳子の声の調子が少し変わった。

「花盛りのいいときに切って逆さにして吊るして、不自然に枯らして、いつまでも変わらない色を遺して。何だか未練がましいって感じがするんです」

菜美はまだはっきりと気づいていない。

「若い人の台詞よね」

多佳子が菜美の目の前に野草を放って、大きなため息をついた。

「そうでしょうか」

「わたしは枯れた後でも色が欲しいわ。そういう未練がなくなったら、どうやって生きていけばいいの」

多佳子の目に涙が溜まり出した。

「女将さん：」

「ごめんなさい、困っちゃうでしょ」

それでも涙は止まらなかった。

「そうよね、菜美さんに押し花はないわ。あなたはただ綺麗に咲くことだけを考えていけばいいの。これはわたし向きの趣味。ね？」

菜美は会話のどこでこうなってしまふのかと途方に暮れて多佳子を見詰めた。

「出てって。もういいわ」

何がもういいのか解からない菜美。

「お前が先に綺麗にしろ」

なぜか急に、江尻の言葉が菜美の中で蘇った。

三

その男はロビーに入ってきた時から一種独特の雰囲気があった。

「ログ材はダグラスファーだな」

「東の二号室になります」

吹き抜けを見渡して品定めをしている男性客に菜美は鍵を手渡し

た。自分の隣の部屋で少し気になったが、一人客に広い部屋は回せない。デコイは一人でも受け入れる。登山客の需要があるからやむを得ないが、なるべく小さな部屋から埋めていく方針なのだ。

「君、何を言ってるか解かる」

目の前で菜美を見詰めている男は、一人でしかも当日の電話予約だけでやってきた。

「いえ、わたし、当館では新人なので」

「立派なんだよ、この構えが。柱も露出している梁もダグラスフアーと言ってね」

訊いてもいないのに男は続けて、米国産で和名はベイマツといい、ダグラスは人の名前で、この英国人が母国にその存在を伝えたのが名前の由来だという。

「そうですね、ありがとうございます。ではご案内を」

話を切らないと仕事に差し障ると思ひ、どうぞ行きましようという意味で、掌で促した。

「君が僕の係の人？」

「あの、一般の旅館と違ってお部屋出しもありませんし、特別にお世話する係と云うものはありません。小さな民宿ですから全員で心をこめて」

「はい、はい、そうだよ。ごめん。それより今夜僕の部屋に遊びに来ない？ 当然僕一人だし、気兼ねも要らないし、安全だし」

この男、言っていることがちぐはぐで可笑しい。そう思った。

「わたし、ここの従業員ですけど」

「お客が客を受け付けたりしないよ、それは分かっている。でも、君アルバイトでしょ、きつと。夜は自由なんじゃないの」

かなりネジが狂っているかと菜美は呆れた。

「はい、自由ですから伺いません」

「理屈だよ、まいったな」

男はそれでも上機嫌で笑った。

菜美は先刻とった宿泊者カードを頭に浮かべた。広瀬幸一、二十八歳、旅行会社勤務。どうやら自分は構わられただけらしい。そう思うと不快感は消えた。

「お車のキーをお預かりします。所定の場所に移動しますから」

「僕の車は大型のランドクルーザーだから下手な人じゃ困るんだ。それと女も、臭い残るし」

そう言うとうと広瀬がキーホルダーを自分の目の前に投げ上げた。戯れの続きらしい。

菜美は落ちてきたキーを素早く取ると、「わたし、上手ですし、じつは男ですから」と言っけてウインクをした。

広瀬が顔を大きく崩して笑い出した。

そんな広瀬が夕食後、菜美にデコイの中を案内して欲しいという。菜美は一応快くという感じで承知した。相手の職業が職業である。仕事の内容までは分からないが、いい印象を与えるに越したことはない。そう思ったのだ。

「この板前、手抜きしてるね」

第一にそれが出た。悔しいが菜美もそれを感じていた。臨時の板前は半分遊び気分である。

「うん、正直でいい。君もそう思っている」

広瀬は鋭かった。一通り案内をしたが、その間中広瀬は、気づいた点を指摘し続ける。笑美にも解るようにとその都度解説を加えることも忘れない。菜美は広瀬を見直し始めた。

「この二階は？」

多佳子の押し花の部屋がある。私室だと言ったのだが、広瀬はそんなはずはないという。ログハウスに入って来て誰もが興味を持つ空間、それを営業に使わないバカはいないと言ってきかないのだ。菜美は迷った。

「見るだけだから叱られないよ」と広瀬が階段を登っていく。

菜美もマスターキーを手にして続いた。広瀬が禁断の部屋の様子を何と評するか興味もあった。

「人間、こういう自然の中にくると普段できない心の触れ合いが欲しくなるんだ、だから談話室。設計者の嘆きが聞こえるな」

押し花についてはコメントが無かった。

「スプルスが綺麗なこと」

さすがにクセのない材木を使っていると、むしろ広瀬は押し花を載せているテーブルの方に関心があったようだ。

「ビールを飲もうよ、おごる。あ、駄目だよ、断っちゃ。売り上げに熱心にならないと」

ロビーの椅子に戻ると、広瀬はまたおどけた調子になった。

「部屋で飲む方が感じ出るのになあ」

まだ誘いを諦めていないようだ。

菜美はなだめるような手つきをした後でビールを注いだ。もう明らかかわれている気はしない。

「総評といくか、口説くのは後にして」

総合評価は菜美も聞きたい。

「いい所が二つ。あとはさっきから言っているとおりで、儲ける気が全くない」

それは解かるが菜美は経営者ではない。それに江尻の二の舞も勘弁だと思った。

「いい所の一つは君、いや真面目に聞いて。もう一つはあそこのデコイのコレクション」

広瀬が指差したのはロビーの片隅にある展示棚だった。

「あれ、このオーナーの手作りです」

「全部？ 二百以上はあるよ、勘だけど」

「全部です。この裏のお宅で彫ってます」

「売るんだ、それなら解かる」

「飾ってあるだけみたいですけど」

「だって、あれプロの、しかも相当金になるって代物だよ、もったいないなあ」

「へーえ」と菜美は陳列棚に目をやった。

「素人はこれだから。ひよっとしたら創っている本人も価値が分か
つてないんじゃないかな」

広瀬が呆れ顔でもう一度デコイの方を見た。

雄大は、菜美が風呂場の一件で何のわだかまりも抱いていない様子に先ずはホッとした。それだけではない、雄大のために一肌脱いでくれたのだ。

昨夜、菜美が内線電話で熱っぽく勧めてくれた。

「社長と民宿デコイの将来のために絶対必要な人だと思います。明日の十時、広瀬さんにオーケー出していいですよね」

旦那さんと言わず社長と言ったのは傍にその広瀬がいたからである。嬉しかった、うっかり目を潤ませてしまったほどに。アルバイトがそこまでしてくれたことへの感謝と驚き。急激に意識し始めた女からの好意であるという喜び。それにつけても、という自分の惨めさ。それらが混淆した感情の高まりだった。

翌日、菜美と広瀬が目の前にいた。

「親父には今朝早くに連絡をとりました。来週にもこちらに来るそうです」

広瀬は雄大ではなく菜美に頷きながらそう言った。

雄大の手許に一枚の名刺がある。K旅行社は中堅のエージェントであり、旅行関連の出版もしている。雄大にもそれくらいの知識はあった。その旅行社の社長令息が広瀬だという。

「ドラ息子です、それもかなりの」

挨拶されたときは人となりを半ば疑っていた。

「親父、ログハウスとデコイが好きでしてね。僕は小さい時から子守歌代わりに能書きを聞いてました。どっちかっていうと親子揃ってマニアかな」

ところが広瀬はマニアという言葉通り民宿デコイの建物としての長所と短所を見事に指摘してみせた。どうやら疑う余地はないらしい。雄大はようやく得心がいった。

しかし雄大にはそれよりも気になることがあった。菜美が化粧を

して来たのだ。夕べ二人に何かあったのかと、想像するだけで胸が騒いだ。

女将としての多佳子のことも別の意味で気になった。起き抜けの顔なのだ。とくに髪が酷い。広瀬と話し合うことは朝早いうちに言っておいた。少しでも危機を何とかしようと思っっているなら協力すべきだろう。それに雄大にも男としての見栄がある。綺麗な妻とまでは望まないがきちんとした妻ではいて欲しい。広瀬の少し斜め後ろに居る菜美と出入り口側の椅子で控えている多佳子と、雄大の目には二人が同時に目に入る。雄大は自分自身に一層の惨めさを感じていた。

「じゃ沢登さんのデコイは全くの自己流ですか」

そんな中でも会話は進んでいく。

「ええ、それもここ五年ほどのことで、それまでは剥製専門でした」

「考えてみれば不思議ですよ、そのとき沢登さんがデコイを始めなければ今日のこの場面はないわけですから」

菜美はクスツと笑った。夕べ菜美の部屋で広瀬が言った言葉を思い出したのだ。

「僕自身はデコイの作者より君に興味があるんだけど。会わないと即刻肘鉄食らうからな」

広瀬も相手によつてずいぶん違うものだ。声の調子まで変わっているではないか。それにしても菜美は、強い視線を感じていた。多佳子に睨まれているらしいのだが、不自然な形で確かめるには抵抗があった。ただ、雄大の目が多佳子を気にして落着かないのでそれと分かる。

菜美はある意味では賭けた。多佳子を挑発するために化粧をしたのである。初めての給与で買うことは買っていたが、決心がつかなかった。一旦化粧を始めたらやめることは難しい。菜美と多佳子しかないデコイでは、始める、止めるという理由が多佳子絡みになるからだ。それは危険すぎる。そこへ広瀬が来た。彼のために化粧をする。多佳子にそう思われていれば菜美風はたたない。それでいて多佳子の女の部分を刺激でき、うまくすれば多佳子を前向きにできる。そう考えたのだ。

昨日の広瀬との軽口も影響している。

「化粧しないのも化粧という訳か、まあスツピンもいいかも。都会の厚化粧の中で息苦しい毎日だから」

「年下のくせに相当生意気言ってますよ」

そう茶化しながらも、きれいにした自分を広瀬に見せたくなくなった。それは否定できない。しかし皮肉なことに、いま菜美を眩しそうに見続けているのは雄大の方だった。

「この菜美さんがね、僕をせっつくんですよ、早くデコイを有名に

してとか、お客をたくさん紹介してとか」

広瀬が菜美の肩に手を触れて言った。菜美のための配慮だとは分る。それにしても度が過ぎた。

雄大は広瀬が菜美をほめるたびに多佳子が萎縮していくのを見ていた。

とうとう多佳子に限界が来たらしい。無言で立ち上がったって出て行くとした。

「失礼だよ、多佳子。どこに行くんだ」と雄大がたしなめた。

菜美は「女将さん、用事なら私が」と慌てて立とうとした。

「いいの、ちよっといいお茶取ってくるだけだから。菜美さんはここにいて、立役者なんだから動いちゃ駄目よ」

言い方に嫌味があった。

「お願いします僕、いいお茶大好き」広瀬はおどけた声で不快感を率直に出した。

「すみません、女将さん」と見送る菜美が可哀相だった。

初めての給与も半分を多佳子に戻して「お貸ししておきます」と言ってみるく笑っていたという菜美。雄大には、多佳子の苦しみや痛みが分かる。だからこそ自分を殺してきた、あらゆる意味での若い活力を自ら封印することで。その活力を呼び覚ましたのが広瀬であり、その広瀬を夢と一緒に連れて来てくれたのが菜美だった。それにひきかえ多佳子はまた、過去の暗い穴倉へと雄大を引き摺りこもうとしている。多佳子に戻ってきた。目が赤かった。きつとどこかで嫉妬の涙を流してきたのだろう。醜いと思った。

「おそらくうちの親父は沢登さんのデコイをアメリカの専門誌にも載せると思えますよ。後は個展かな。その可能性は充分です。でなきゃあ、あの人はここに飛んではきません」

「でもここへきてみて、これは駄目ということは：」

「ありません。僕の目利きには親父も一目置いてますから」

「あの：」と多佳子が広瀬に語り掛けた。

雄大は厭な予感がした。

「主人のデコイのどこにそんな価値があるんでしょうか。ただの鴨の模様にしか見えませんか」

「特に顔です、哀しいような、寂しいような、それでいて自分を射殺す者への激しい憎しみを感じる。芸術品と言えるでしょうね」

広瀬が多佳子に向きなおって言った。

「それ、わたしたち夫婦の顔です」

菜美はハツとした。

「あなたただけ明るい顔になるなんてずるじゃないの」

ゆらりと立った多佳子が雄大に言葉を掛けていているのに菜美の顔を見下ろしている。

菜美は背筋が寒くなるのを感じた。

「多佳子、やめなさい」

忘れかけていた症状が顔を出した。雄大は、多佳子の病的な嫉妬心が原因で辞めていった若い女たちのことを想った。

「いつからそんな若々しくなったの」

揺れる多佳子を雄大は立って抱え込んだ。

「私だけ置いていくなんてひどい」

「隣の部屋で休もう、な？」

菜美は雰囲気は無気味さに体を硬直させていた。

「あ、そうだ奥さんの押し花ね」

「広瀬さん、だめっ！」

広瀬には多佳子の胸の内が読めていない。単純なひがみと解釈しづらい。そうであれば菜美が止めた理由も解からないに違いない。「とても素敵だった。あれは客室とかパブリックに飾ると効果的ですよ」

「見せたの、この人に、菜美さん！」

多佳子の形相がさらに歪んだものになった。

「すみません、女将さんに黙って」

「多佳子、菜美さんは善意で」

雄大はとっさに菜美をかばった。詳しい事情はもちろん知らない。「嫌、いやいや、いやあ！ あそこはわたしの」

たった一つの心の隠れ家。そう言いたかったに違いない。菜美は押し花の部屋で自分自身を探してさすらう多佳子の姿を思った。それが土下座をしての謝罪に繋がった。

「あなたって何様？ 我が物顔で何をするつもりなの！」

「多佳子！」と、さすがに雄大も声を荒げた。

「待ってくださいよ、僕が無理やり開けさせたんだ、菜美さんは悪くない」

広瀬もどうやら事情がつかめてきたらしい。「中に入ったくらいで何だって言うんだ、一体」と堪らずに口にした。

「僕も入れてもらったことがないんだ」

雄大は広瀬の顔を見て言った。

それに合わせたように多佳子が雄大の手を振り払って崩れ落ちた。「菜美、恩知らずのクソ女、わたしの布団を敷いて、早く行けえ！」倒れた多佳子の口元に泡のようなものが見える。

「はい」と立ち上がった菜美の目から大粒の涙が落ちた。すべてが裏目に出た。それが悔しかった。

その日の夜、菜美は広瀬に抱かれた。殺してしまった不仲の前夫にレイプされた夜以来なので二年数か月ぶりの「男」だった。

無性に寂しかった。罪を犯す前も刑務所を出てからも何一つうま

くいかなかった。それがデコイに来て小さな光が見えた。衣食住がとりあえず保証され、菜美の過去を知る者は誰一人としていない。あれこれ穿鑿されることはあったが、幸か不幸か経営不振でそういう人たちが辞めていき、終には菜美一人になった。いろいろな意味での社会復帰を図るには恰好の場所になった。一番心配していたオナーとの間もこのところうまくいっていた。それが今度のことでは壊れた。しかも難しい同性との間で。見えていた光が消え、この先もずっとうまくいかないような気がしてきた。だからと言って自暴自棄で広瀬と寝たわけではない。広瀬は優しかった。人間的にも菜美が出会った男の中では最良に思えた。本当なら相手してもらえないレベルの人と云ってもいい。

菜美は何度も燃えて朝を迎えた。

「いつそ僕と一緒に来ないか」

このままデコイに居たらそれぞれが不幸になると出発前に広瀬が言った。

それぞれが不幸だからデコイに居る。菜美はむしろそんな気がした。広瀬は菜美の過去を知らない。影の部分を見ていない。だから誘えるのだ。気に入られ評価され期待されてから醜い古傷を見せるのは辛い。愛されてからでは取り返しがつかない。いくらのぼせていても広瀬が菜美を純粹に愛情で抱いてくれたとは思わない。お伽の国の話ではないのだ。しかしそうなるのを恐れるのは勝手だし、甘美さはその中にしかない。

だから可能性をゼロにしてしまう言葉は使えなかった。夢をつないでおく、それくらいは許されてもいいと思った。

「無理するなよ、一人は結局一人なんだから。僕は君の体が心配だから言うんだ」

広瀬の声が温かかった。

ランドクルーザーに乗り込んだ後で広瀬は彫刻のデコイのことに触れた。

「うちの親父本当に来るよ。民宿デコイの将来性は保証しないけど作品のデコイは世の中に出ると思う。その時に障害になるのは沢登さんの消極性だな。引っ込み思案になるなって、君から励ましてやって。ちよつと妬けるけど」

「わたしなんか」と菜美は引いた。

「君だけだと思う、それが出来るのは。彼が君を意識しているのは間違いないし」

言われて菜美は、雄大の熱い視線を思い出した。

「きのうも女将さんを救急車に乗せたあと君のことを暫く見続けた。君に出て行かれやしないかと、きつとその方が心配だったんだろう。未だ帰っていないんだろ？ 彼」

「早くても今日の午後だと思う」

だから広瀬にこんな早く帰らなくても、言いたくなる。

「彼はすぐ帰れないと思うから尚更気になったんだな」

広瀬がエンジンをかけた。

「とにかく君がここにいる間は客を紹介するよ。君のサービスマンなら誰にでも推薦できる」と広瀬が雄大に渡したと同じ名刺を差し出した。

「ここを出ることになったら必ず連絡すること。これは色恋とか遠慮とかそういうことには関係がない、商取引上の義務に近い。菜美、この意味わかるよね。あ、それと参考までに訊くんだけれど、君は学卒だっけ？」

「いえ、何とか高校までは出ていますけど」

「その頃やっていたスポーツとか趣味は？」

「運動神経は良い方だったけど特に部活はやってないわ、趣味は読書かな、下手な詩なんか書いて現実逃避もしてた、笑えるわね」

「そうか、わかった」

この上まだ何かしてくれるつもりなのか。たとい便宜を図ってくれたとしても、もう甘える気はないが、心配りが嬉しかった

「逢えて良かった」菜美は心からそう思った。

「まあ、女将があんなでは君の声、すぐにまた聴けそうだな」

そう言うと広瀬は、すでに用意をしていたのだろう、紙に包んだ金を菜美に握らせた。

「誤解するなよ、チップじゃない。僕を訪ねてくるときの旅費だ。

その時にこの民宿が君の給与を払えるかどうか怪しいからな」

広瀬が菜美の肩を引いた。二人の距離が極限まで近づいた。

「言い忘れたけど、今日の菜美、とっても綺麗だ、正直なところ帰りたくない」

菜美は涙をこぼした。歯が浮くようだと、眉に唾をつけるかつての自分はいない。広瀬への思慕が堰を切って一気に流出した。

「行かないで、ここで抱きしめて」

広瀬がそれに応えて菜美の唇を吸った。

「菜美、乗れよ」

長いキスの後で広瀬が助手席のドアを開けた。

四

朝露が草から地面に落ちる様子を菜美は食い入るように見ていた。小さな水の粒がどういう約束事なのか集まっては尖った葉の先に辿り着く。そこで限りなく球に近づくのだが、その過程でくると回るような気がした。

太陽が出た。山の稜線からなので海のとぎのように大きくはない。菜美は自分と土手の上の草を結ぶ一直線状に朝日と呼んだ。弧を描く草の葉が太陽の丸みと重なる。それが狙いだ。露がまた激しく動き回り同じように葉の先に来た。膨れた水玉がきらりと光ってオレンジ色の縁取りが出来た。それも一瞬、細長い葉を引くようにして雫になった。

いつからか水に惹かれている自分に気付いた。あれからだろうか水が前夫を殺してくれた。家庭内の暴力地獄から解放してくれた。水は自分の化身。そうなのか。今も黒い水に体ごと攫われる夢を見る。

一生をかけて償う。もしそれが真の意味ならば菜美に救いはない。そう思いたくなかった。

菜美は大声で広瀬の名を呼んだ。その声に驚いてか傍らの草からまた露が地に落ちた。

朝の散歩は休日の唯一の楽しみだった。

山道を外れ菜美は雑木林の中に入った。雄大によれば一度でも霜が降りると一気に落葉が早まるという。しかし今は気の早い葉がちらほら気ままに舞っているだけだ。

広瀬が去ってからの四日間は忙しかった。未だ彼の紹介客は一人も来ていないが多佳子が居ない。病院から実家に移ったという。

「治療が必要なのは体ではない」

それが雄大から聞いた医者 の 所見だ。

菜美はオーナー夫妻の間に何があるのかは知らない。ただ多佳子に接して気持ちの不安定さには少なからず戸惑っていた。特にあの日の多佳子は狂気に近かった。

とにかく菜美は、裏と表の仕事を独りでこなす羽目になった。雄大の食事作り、下着も洗濯した。傍から見れば女将が変わったとしか思えないであろう。

「菜美さん、いや女将さん、また会いましたね」

斜め後ろから掛けられた声には聞き覚えがあった。

男はあの大和田だった。連れている犬が挨拶でもするかのように一つ吠えた。

「こんな早い時間に遊んでいいんですか。沢登さんの朝ごはんはもう作ったというわけですか」

菜美の胸元を覗くようにして近づいて嫌な男はニヤついた。

「何か勘違いしてませんか」

菜美は爽やかな雰囲気害されて反発をした。

「そんな言い方しなくてもいいでしょ、僕だってまだ男だ」

菜美は顔を背けて歩き出した。

「そんなに違うかなあ、江尻や沢登さんと」

大和田が犬をけしかけながら追ってくる。「きれいな仮面の下の恐ろしい顔。恩人の多佳子さんを追い出して、沢登さんを誑し込んで、すっかりデコイの女将気分とは呆れたもんだ」

菜美は背中を押されて木の根元に倒れた。

大和田の臭い息が顔にかかった。

「何なら手を回して調べてやろうか、こっちは元新聞記者だ、どうせ何かしでかしてここに来てるんだろ、ええっ！」と馬乗りになった大和田が菜美の乳房をつかんだ。

「ばっかやろう！」と言うと同時に菜美は膝で大和田の背を蹴り、次いで前にのめった大和田の顔を右拳で強か殴った。

犬もろとも横転した大和田が顎を押さえて目をぱちぱちとさせている。

「黙って大人しくしてりゃあ、いい気になりやがって」と、菜美は着衣を整え、怯えている犬に唾を吐いてから歩き出した。

広瀬と別れて一週間を過ぎたところから予約台帳に紹介客が数人載り出した。考えてみれば巷は秋の行楽シーズン、この時季に集客できない方が不思議だろう。

菜美は一日十数時間働き続け、夜は泥のように眠った。広瀬が傍に居るような気がして充実感があつた。一所懸命にやる。そのことが自分を変えてくれるような気がした。そのことで広瀬のレベルに少しでも近づけるような気もした。

「汗を流せば流すほど皆さんの過去が洗い流され、早く綺麗な心と体が戻る。そう考えてください」

女子刑務所でどこかの女性講師が言っていた。菜美は出所してからずっとそれを実行していることになる。

この日の夜も風呂から上がり寝るだけになっていた。

ドアを小さく叩く音が聞こえた。

「はい、ちょっと待って」

また雄大がフルーツでも持ってきてくれたのだろうと思った。ここ二日は無かったが、忙しくてろくに食事がとれなかった日は必ずと言っていいほど食べ物届けてくれている。

「いつもすみません」

ドアを開けた菜美は息を飲んだ。半裸の男がずっと部屋の中に滑り込んだのだ。そして息をする間もなく抱きしめられ唇を奪われた。言葉で機先を制するとか、相手の負い目をつくとか男の精神面を制御できるならともかく、純粹に男の力で迫られれば女はひとたまりもない。菜美は口と体の自由を取り返そうともがいた。悔しいことに男は菜美のその動きさえ楽しんでる。男の硬いものが菜美の下腹部を押している。男の舌が口を開けると迫っている。菜美は唯一

の反撃法を思いついて男のデイトピキスを受け入れた。男の目が驚愕の色に変わり大きく歪んだ。菜美が男の舌を噛んだのだ。放たれて顔を見ると、竹下と行ったと思う、二十代の客だった。

「何のつもり」

客に対する言葉遣いなどはいらない。これはれっきとした犯罪なのだ。菜美はそう思った。男は喋れないでいる。加減はしたつもりだが相当痛むらしい。

「聞いてるだろ、広瀬に。おおっ、痛え」

広瀬の名を聞いて菜美は混乱し始めた。確かにこの男竹下は広瀬の初めての紹介客だった。チェックインも菜美がしている。

「サービスしてくれるって聞いてんだよ、それを何だい舌なんか噛みやがって。広瀬も許せねえ、すぐやらせる女がいるなんて嘘言いやがって」

「すぐやらせる？」

菜美は男の胸を拳で突いた。男の性欲の証は既に萎えている。

「この民宿教えてよ、東の一号室に菜美って従業員が居るからそいつとやれって」

菜美は崩れそうになる体を、広瀬を信じようとする気持ちでやつと支えた。

「嘘。嘘よ、広瀬さんがそんなこと言う訳がないわよ！」

「嘘じゃねえよ、少し歳はいつてるけど顔も体もいいし何たってセックスがすげえ、東京のいかれた女なんか足元にも及ばねえって」

これには菜美も耐えきれずに膝をついた。

「それだけ？ 彼があなたに言ったの」

「いっそ全部聞こうと思った。」

「必ず一度は後ろからしてやれって。帰るまでに三万位は渡せ。ただしその場で渡すのは売春になるからやめろ。話は俺から通しておくって。だからいいのかと思って」

もう疑いようはなかった。

「いいわ、もう」

涙が溢れた。東京に出てくるときの旅費、そう言って渡された金はセックスの対価だった。菜美は悲しさよりも悔しさで泣いた。

「俺、行くよ、悪いから。騙されただけだから警察は勘弁しろよな、じゃあ」

「ちょっと待って」

菜美は手の甲で涙をぬぐいながら立ち、テレビの横にある壘を手にして戻った。

「もらい物だけど本醸造の日本酒。これを持って行って。誰かに出くわしても無理言って都合してもらったって言えるでしょ。私もそう思ってあなたがしたこと、忘れるから」

「あんたって、何と言うか：」
酒瓶を手にして男が言葉を詰まらせた。
「いいから早く出て行けよ、ホラ、眠いのよ、わたしは」
菜美はそう言って半ば笑いながら男をドアの外へ押し出した。
閉めたドアを背にして部屋の中を見ると少し歪んでいた。霞んでもいた。まぎれもなくそれは再び溢れ出た涙のせいだった。

五

多佳子がデコイに居なくなっただけからの一週間、雄大は菜美と一緒に働くことよって変わっていく自分を楽しんでた。忙し過ぎてゆっくり話すことも無かったが、眼でその姿を追い耳でその声を確かめ体の温もりが伝わる距離で仕事をする。それだけで経験したことも無い力が湧いてきた。

雄大はすすんで厨房に入った。何ができるわけではない、ただ板前の手助けをしたただけなのだが、客に出している料理の質が変わった。派遣されてくる板前がデコイをバカにしなくなったのだ。雄大はオーナーの姿勢が一番重要なことをこの一事で知った。

気を能くした雄大は菜美に習いながら、レストランの準備、食器洗い、ベッドメイク、客室清掃と守備範囲を拡げていった。そしてフロントと会計の手伝い以外ほとんどしなかったこれまでの自分を大いに恥じた。問題は客の入り云々ではなかったと気づいたので。

雄大はそこで、一つの決断をした、押し花の部屋を客用の談話室にと解放したのだ。客たちの好評を得たことは言うまでもない。

実はこの決断の裏には雄大の多佳子に対する激しい憤りがあった。多佳子が実家の木村家に再びデコイの買収を求めていたのである。宮本の再三にわたる電話がそのことを物語っている。

雄大を変えたその日の電話は最悪だった。

「アルバイトの女、給料を返してきたというじゃないですか、そういうけじめの無さが義姉さんを疑心暗鬼にさせるんです。まさか離婚してその女を後添えになんて考えてないでしょうね」

話がとんでもない方向にねじ曲がっていた。裏で多佳子が菜美を中傷しているに違いない。

「とにかく義姉さんに帰って来られちゃ困るんです。そもそも世間体が悪いからそっちに引っ込んでもらったんですから。女房はもうカンカンになって怒ってますよ」

「多佳子もお前らも足を引っ張るしか能がないのか！」

雄大は声を震わせて怒鳴り、大きな音を立てて受話器を置いた。菜美のお陰で集客の手立てもついた。長くは続かないにしても、凌いでいるうちに次の手は打てる。雄大自身にもデコイ作りで脚光

を浴びるチャンスが来ている。あらゆる面でやる気もやり甲斐もできたこのときに、また多佳子の邪魔が入った。

雄大は怒りに任せて、一旦は仕舞うだけにしていた押し花を取り出しストーブで焼き尽くした。もちろん菜美にも諮ってはいない。

雄大の半月は長かった。

この日菜美を酒に誘おうとしたのもひと時の安らぎが欲しかったからだろう。もちろん菜美を労いたい気持ちもあった。毎回フルーツでもあるまい。雄大はそう思っただけで開いている西の一号室に酒肴を用意した。客は三組、一人客が東の三号、後は西の四、五号室である。多少今夜酔っても計六人程度の朝食位何とかなる。そう思った。

午後十一時半、雄大は菜美の部屋の前に立った。多佳子が居ればとても叶わないことではある。

ノックをしようとした雄大の耳に菜美の叫びにも似た声が聞こえた。何ごと、とドアノブに手をかけて雄大は躊躇した。声と言うよりは大きな喘ぎに近い。まさかという気持ちになり、ドアに耳を付けて息を殺した。同時に自分のその姿がいかに無様かを思った。

結局、入れなかった。

「あの菜美が……」

ロビーに戻ろうとして東三号の前で立ち止まった。

「まさか」と、フロントに駆け寄り思い切って三号室に電話を掛けた。客の青年が出たとしても何とでも口で繕える。喉が渴いた。コールが二十を超えたとき、雄大は左の握り拳でカウンタを強か叩いた。唇がわなわなと震えた。それが菜美への非難ではなく、客への嫉妬心からと分かるまでに時間がかった。その分析を否定するも一人の自分がいた。否定すれば菜美にたいする攻撃が始まる。それを厭えばいま体験した事実を否定するしかなかった、菜美の声は寝言であり、電話に出なかった客は眠りが深かっただけなのだ。

雄大は男を目撃することを恐れて足早にロビーを去った。

「自分でしてたの」

菜美が顔を上気させて答えた。

雄大が、誘いに行ったら中で大声がしたので遠慮したと菜美に言ったのだ。

「自分で……」という意外な言葉に、雄大は言葉の意味を掴むまでに一分はかかった。菜美がその間ずっと唇を噛んで見詰めている。

「ごめん」

眼を伏せて雄大は謝った。

「入ってくればよかったのに」

菜美が一転して微笑しながら言った。

疑うくらいなら確かめれば良かったのにとの非難ともとれるし、雄大に相手をして欲しいという誘惑ともとれる。

「明後日の夜にね、お客がまた五、六人だから、やり直してことどう？」

長い沈黙の後で雄大はそれだけを言った。一瞬、脱衣場で見た菜美の裸体が目の前にいる菜美の姿に重なった。

菜美がコクリと頷いた。

飲むほどに酔うほどに雄大の話は愚痴になった。何もかもさらけ出して楽になりたい。雄大はその衝動に勝てなかった。

「女将さんにとっては雄大さんが夢中になってる猟銃は愛人の化身だったわけね」

雄大は菜美に下の名前と呼ばせた。社長と呼ばれる柄でもなく、デコイは会社にもなっていない。それに沢登という姓は言いにくい。

「いたんでしょ？ 実際に」

それが事件のポイントになる。

「一年以上付き合ってたかな」

「じゃあ、女将さんはその女性に撃たれた、そういうことになるなあ、やっぱり」

「そうなら僕が一生地獄でも仕方がない、菜美さんはそう言うんだ」雄大はなぜ暴発事件について喋っているのかも分からなかった。

ビールは中壇を五本開けているが、ここまで酔ってしまう量ではない。原因らしきものを探せば疲労だった。

「その猟銃、いまも？」

「多佳子が管理しててね、寝室に鍵付きの収納ケースがあるんだけど、その中」

「違うの、愛人のこと」と菜美は小さく笑った。

「ああ、消えた。怖くなったんじゃないかな」

「彼女にとってはその程度の男だったのね、雄大さんて可哀相」

菜美も酔いが回っている。

「君はどうなんだ。男、男」と、雄大は菜美にビールを注いだ。

「悲惨なレベル、笑っちゃう」

「結婚はしてるよね、一度ぐらい」

雄大は酔いに感謝した。普通ならとても不可能な会話をしている。これも二人だけで忙しさを共有してきた成果だろうか。仲間意識に似たものが生まれている。

「十九で結婚、一年で離婚」

「あーあ、散らすなよ、折角の花を」

「そいつね、女を抱けない人だったの」

雄大は「できすぎだ」と笑った後で急に沈みこんだ。

「嘘よ、いまの。…どうしたの？」

菜美は接するほどに雄大の顔を覗き込んだ。

「いっそ僕も不能だったら毎晩苦しまなくても済んだのにな、と思つてさ」

雄大は五年に亙る女ひでの歲月にため息をついた。

「女将さんも辛かったと思うけど」

「まあ、悪いのは僕だから、常識的にみて」

「ううん、そうじゃなくて。傷ついたからじゃなくて立ち直れないから、でもなくて。雄大さんの邪魔しかできないんじゃないかって、毎日そう思っていることが」

本当はそうは思わない菜美だった。自分で作った繭から出ようとせず、綺麗になろうという努力もしない。夫の前に請求書を出すごとく毎日過去を突き付けている。そんな女に誰が同情などするものか。わたしなら雄大をこんな惨めな姿にさせてはおかない。事実私はわずかな間に雄大をやる気にさせている。菜美は変わりつつある自分の全てを肯定した。

一方、雄大は胸が張り裂けんばかりの愛を菜美に感じていた。

「いい女だ、君は」

うっかり咽喉がゴクリと鳴った。欲しかった。誰だかわからない客に盗られるよりは無理強いしても自分がとりたい。菜美が自慰をしていたというのは嘘だ。しかし真実を嘘にしても雄大は菜美を大事に想いたかった。

多佳子しか傍に居ない雄大なら特にそう感じるに違いない。菜美は生唾を嚙下する雄大を見ながら優越感に浸った。多佳子と言え、菜美が化粧をすれば女を競って多佳子も綺麗にするはずという江尻の予想は見事に外れた。多佳子はその種の燃焼力さえなかったのだ。菜美はあの日の後もずっと化粧を続けている。素顔のまままで生きられるほど世間は真っ直ぐではない。みなそれぞれに化粧をし、仮面さえ被って生きている。そういう世間では菜美が更生を誓い、見せようとしていた素顔こそ仮面に見えるに違いない。そうであれば素顔という仮面をとって本音で生きていこう。菜美はそう思った。

「そろそろにしません？」

菜美は時計を指差して、笑顔をつくった。何も起こらないなら体を休めたかった。

「居てくれるよね、ずっと」

雄大が俯いて言った。病身の少年が母親にすぎるような響きがあった。

菜美は雄大の手を引いて立ち上がった。不思議なくらい優しい気持ちになれた。

菜美の手の温もりが引き金になった。雄大は大きな荷物を抱える

ような不器用さで菜美を抱きしめた。シャンプーの香が鼻腔を充たし、成熟した女の香が雄大の男を満たした。菜美の両手がしつかりと雄大の腰を巻いている。

雄大は感極まって「ああ」と声を漏らした。

そのとき、ドアが勢いよく開いた。

二人は弾けるようにして離れた。

「何だよ親父、こんなところで」

「徹也、お前いつ？ 何で？」

雄大の二十歳になる息子だった。菜美も以前多佳子から聞いたことがある。

「雄大さん、小海が寝ちゃってるの、布団かベッドなんとかして」

菜美の耳に若い女の声が飛び込んできた。

翌朝菜美が客室を片づけていると夜中に紹介されたばかりの福本

麗子が寄ってきた。

「菜美さん、おはよう」

「夜遅かった分、朝寝坊しないともちませんよ。未だ十時、早すぎますって」

菜美は仕事の手を休めずに言った。

「なかなかやるわね」と麗子が煙草をとりだして、「いいところ邪魔しちゃって悪かったわ」と火を点けた。

「失礼しました」

「あら、いいのよ、裸で絡み合ってたら慌てちゃうけど。もっともけっこういいとこまで行ってたって話だけ」

麗子がいたずらっぽく笑った。

「麗子さん、私は社長とは別に」

「それは分かるけど、ここを仕切る気でしょ、雄大さんを男にして」菜美は麗子を鋭いと思った。二重の意味にもとれる言葉が怖い。

「感心してんのよ、台帳見たらけっこう予約入ってるし、あの怠け者の雄大さんをやる気にさせたし、女としてもまた格好いいし」

派手な服装の女だったが、不思議なくらい嫌味が無かった。それにしては夜中に着いたというのにもう予約台帳に目を通して驚かざるをえない。

菜美が昨夜ベッドに運んだ二歳の小海は徹也との間にできた子だと聞いた。それなのに義父にあたる人を雄大さんと親しそうに読んで憚らない。徹也と結婚する気もいまのところないという。

菜美はいろいろな意味で麗子に興味をもった。

「あなたが相手じゃ多佳子さん無理だわ。弱さを武器に雄大さんの気を引くか、狡さで彼の足に絡みつくか、どっちにしても勝ち目なさそうね」

「麗子さん、わたし違うってば」

「はいはい、そういうことにしておくわね。でも嬉しいわ、久しぶりに同じ匂いのする女に出遭えたって感じ」

麗子は気持ちよさそうに煙を吐いた。

菜美は掃除の手を休めて麗子を見詰め、「もう弁解は無駄なのでやめた」と、怒ってみせた。

「そうよ、なにせ雄大さんを世に出そうとした人なんだから。聞いたわよ、デコイのこと」

麗子の言葉で菜美は広瀬の顔を思い出そうとしていた。目鼻の無い口だけの顔が浮かんだ。

「でもそれ、誰から？」

「多佳子さんよ、徹也に電話が来てき、泣いてたらしいわ」

「まさか、嬉しくてじゃないでしょ」

「あら、分かっているじゃないの、悔しくてよ。嫉妬というより憎悪ね、あそこまでいくと」と麗子が片頬で笑って、「醜いとしか言いようがない」と言った。

「悪者にされるのは慣れてるけど」

菜美は小首を傾げて溜息をついた。

「気にすることないわよ。それよりその社長ってデコイに来たの？」

「まだ。もしかしたらその場限りのことかも」

それも菜美の体欲しさでついた嘘、来るわけがないと菜美は思った。紹介客を断ろうとして名刺を頼りに広瀬に電話したときも該当する社員はいないと言われている。

「話がうますぎるもん、眉唾ね、きつと」

麗子が八重歯をのぞかせて笑った。

「ところでやる気出してるときに何だけどき、ここ、終わるわよ、買収されるの」

麗子が煙草を勧めてくれた。菜美も煙草を吸うはずだと頭から決めつけている。

「多佳子さんのご実家でしょ」と好意を受け取りながら言葉を返した。雄大の愚痴の一つとして聞いてはいる。

「雄大さん、そこまで話してるってことはあなたのこと、本気なんだ」

菜美は微笑みを使ってそのところは曖昧にした。

「でも実際の営業はほとんど変わらないんですよ」

「やだ、本気にしているの、それ」

麗子によれば、木村家の本当の目的はデコイの敷地に日本酒の醸造所を造ることだという。この近くに湧き出ている水が酒造りに最適なのだとか。驚いたことにログハウスの一部を残して酒の試飲コーナーと現地販売をすることまですでに決まっているらしい。

雄大から聞いた話とは大分違う。そうだとすると身内の多佳子は良いとして、雄大はどうなるのか。菜美はお人好しな雄大のことが心配になった。

「倉庫の管理人というところかな。多佳子さんは実家の邪魔者だから一生雄大さんに押し付けられると思うの。その限りでは経済は安定するんじゃないかな」

菜美は多佳子の腸は腐りきっていると思った。形骸化した夫婦だとしてもあまりにも身勝手が過ぎる。

「これ、宮本って奴の情報だから確かよ」

徹也も金欲しさに協力を約束した。今回の訪問はそのためだという。

「今頃あっちで喧嘩していそう」

麗子が他人事のようにニヤツとして言った。

「クールなのね、ずいぶん」

菜美は呆れたような顔をした。いつの間にか麗子の女友達のような口調になっている。

「私は徹也にお金を返してもらえればいいの。あのバカ、わたしが体で稼いだ一千万を借金返済に使ってしまったって許せないのよ」

普通に使われるなら気が付いて止めることができる。しかし弁済に使われたら最後、一瞬にして金は消えてしまう。菜美の千五百万も全く同じだった。

「それにしても貯めたわね」

麗子はまだ二十四、五にしか見えない。

「だから体でよ、フーズクとかソープとか何でもやったわ」

麗子は確か同じ匂いがすると言った。いまの話だと菜美もそうだったと思われていることになる。

「菜美さんも、でしょ？」

案の定、礼子が確認をしてきた。

「僕が所有者だ、売れるものなら売ってみろ。お前に何の権利がある」

自宅エリアでは雄大が徹也と言いつ争っていた。

「多佳子の実家に何の権利がある、言ってみろ」

雄大は重ねて迫った。

「あの事件の損害賠償が済んでないだろ」

答えに窮した徹也が脅すような目つきで言った。

確かに猟銃の暴発を招いた過失は雄大にあるとされているので多佳子は損害賠償を請求できる。そうなので雄大は弁護士忠告を受けて、三年の消滅時効が完成するまでの間小さくなって過ごしていたような気がする。木村家も徹也も二十一年と勘違いしているらしい。

それはそれとして、期間云々よりもそこまで考えていること自体が雄大には腹立たしい。

「宮本だな、多佳子にはない発想だ」

「甘いよ、女は怖いんだ。電話してきた、居る場所がないって、他人に盗られるくらいなら実家に売って」

「誤解だ。母さんはいま普通じゃない」

「恥ずかしくないのかよ、自分の女房を捉まえて気が狂ってるなんて」

「待て、そうじゃなくて。第一時効はもう成立してるし」

「親父は気楽だよ、あんな女にタマ握られて」

「菜美さんを侮辱するんじゃない！」

「侮辱？　じゃあ親父はおふくろを侮辱してないのか。この目で見ただからな、あの女の部屋で」

「徹也、いくらで売った？　僕を」

「何言ってるんだよ」

「木村家からお前に金が出てるんだろ、多佳子のためだなんて言わせないぞ」

黙り込んだ徹也を雄大は哀しい目で見詰めた。

雄大は徹也が帰ってから東の二号室に寝泊まりするようになった。理由は言うまでもない。菜美の部屋との往復を容易にすると同時に客が菜美の部屋に侵入しないよう監視するためである。

菜美は嫌がるどころか笑顔で小さな引越しを手伝ってくれた。以後夜の関係は毎日のように続いている。それでも臨時の板前が帰る午後六時までは自宅を中心に動いているので外部の人間には知られていない。

雄大は広瀬の紹介と思しき予約客を個別に断っていった。デコイに宿泊する目的が違う。もつとも今まで客と絡んでいる現場を押さええたことは一度もない。

「何もなかったわ」と笑う。

問えば菜美はいつもそう応えてもいる。雄大は菜美関係ではそれを信じることにした。穿鑿を続けて肝腎な今の生活を壊してはなんにもならない。雄大の頭は四六時中菜美のことで一杯だった。

雄大はしなやかで敏捷な菜美を愛した。汗を厭わず流れるように仕事を熟し、男のように車を操り、時には詩人のように雨垂れと遊ぶ。雄大のファイルには無かった女だった。雄大は菜美に強く惹かれていく自分をもう止めようがなかった。押し花を焼いたとき雄大は多佳子を心の中で斬り捨てた。一緒に前を向けない夫婦が辿る悲惨な道を、それと知りながら免れる努力すらしなかった、これまでも、いまも、これから、そんな二人の間に稔りはない。その時は

自分の人生を回復するために多佳子と別れようと思ったのだが、今にして思えばそれはきつと、菜美に繋がる決断だったのだ。

菜美は、気持ち的には遠い昔、嫌なタイプでなければ二、三万の金で、いや大抵は金抜きで男に抱かれた。貧しかった生い立ちや初婚の失敗が原因だとは言わない、当時の菜美にとっては男もセックスもその程度のものでしかなかった。定期便の運転手の間でそれは密かに拡がり、菜美は十人ほどの男を相手にした。昼夜を問わずノルマや自転車代金のローン返済に追われて遠距離を孤独に走り回る男たちは皆、優しく明る性格だった。じめじめした感じや負い目は全く無く、終わった後は笑顔でお互いの仕事に戻るのがふうだった。もし菜美が男性観や恋愛観をそのまま変えなければ人を殺さずに済んだだろう。菜美は詐欺師に出遭い恋をしてしまった。過去を悔やみ一人の男に尽くしたとたんに裏切られたのは何とも皮肉だった。そして懲りずに広瀬でも失敗をした。一人の男を信じて夢中になると不幸や挫折が襲ってくる。セックスも一種のスポーツと考えた方が傷つかないで済む。菜美は今度こそ男に距離を置くと自分に言い聞かせた。幸い雄大は歳も一回りは違うし、菜美を夢中にさせる容姿も技巧も無かった。菜美は自分の心と体を冷静に見詰めながらむしろ雄大をリードしていた。また、男を見る視点を変えてみると、雄大の陰ながらの心配りや時たま見せる極上の優しさはなものにも代えがたく思えてくる。

こうして雄大と菜美の関係は漸く深まっていった。

そんな或る日――

菜美はスーバーマーケットで突然見知らぬ女から声を掛けられた。

「あんた、デコイでバイトしてる菜美って女だろ」

見れば出産間近と思しき妊婦だった。

「ええ、そうですけど」

「何か」と言う前に頬に平手打ちが飛んできた。腕が細くてしなやかな分、鞭が効いている。かなり痛かった。

「うちの富男と寝たんだってえ！」

「おい夏枝、バカ何してんだ」

聞き覚えのある声に後ろを見ると、江尻が買物籠を下げている。

「妊娠中を狙うなんて女として最低だよ、人殺しの前科者ってそんなところまで汚ないのかい」

「夏枝、何言ってるんだ、こんなところで」

菜美の血の気が引いた。

パンツという乾いた音が店内に響いた。菜美が江尻の頬を思い切り叩いたのだ。

これには夏枝も驚いたらしい。

「最低！」と菜美は吐き捨てるように言うと二人に背を向けて歩き

出した。

「待てよ、誤解だ、俺じゃねーよ」

江尻の声に振り返った夏枝の怒鳴り声が重なった。

なぜ江尻に話してしまったのだろう。菜美は自分でも不思議だった。おそらく江尻に見抜かれたと思い、デコイも追われると感じたのだろう。出所してからすぐに仕事を探した。まったく相手にされなかった。そして一縷の望みを託した郷里ではゴミ以下の扱いをうけた。そうこうしているうちに出所の際に手にした作業賞与金と額をついた。刑務所内で働いた労働の対価というべきものだが、その額は知れている。東京に戻る途中、旅費が切れたところで多佳子に拾われたのだ。どこかに諦めがあったに違いない。その証拠にはそれ以後前科について誰にも喋っていない。希望らしきものが生まれなかったからである。

同じ傷を持つ者の裏切りだけに許せなかった。江尻が菜美を笑っている様子を目に浮かび、やりきれない気持ちで車に乗った。

翌日江尻がデコイにやってきた。

夏枝から順に噂の出所を辿っていき、源が分かったのでこれから押しかけるといふ。

「ほかのことなら疑われてもいいけどよ、前科ばらしたなんて冗談じゃねえ、それだけは無いって」

犯人は元新聞記者の大和田だと江尻が言った。

菜美は雑木林の中で大和田に脅迫まがいに告げられたことを思い出し、江尻にそのまま伝えた。

江尻は菜美の誤解が解けたと感じたのか、車に飛び乗り「野郎、見てやがれ」と言って立ち去った。

菜美は反射的に江尻を殴った掌を見詰めた。

「ごめん」と、とりあえずつぶやいた。

六

東の二号室で菜美は雄大の寝顔を見ていた。抱かれた後の火照りがまだ残っている。数時間も前のことなのにそんな気がした。

雄大は長かっただろう昨日一日の仕事を終えて泥のように寝ている。歳の差は隠せない。だからこそ頑張りが愛おしかった。

横殴りの雨が部屋の窓を叩いている。当たっては流れ、さらに当たっては流れ、雨水は常に変わっているはずなのに、菜美の目にはたくさんの透明なアメーバが張り付いて動き回っているように見えた。昨日戻ってきた江尻によれば、怒りに任せて大和田を殴り倒してきたらしい。ハツとして菜美は、覗き込んでいる大和田の顔が

窓に浮かんだようで慌ててカーテンを閉めた。目を閉じたところ睡魔が再び襲ってきて菜美は再び雄大の眠るベッドに倒れ込んだ。銃声がして菜美は飛び起きた。窓が眩しかった。雄大が居ない。急ぎ着替えて東棟を走りログハウスに出た。反射的に二階を見た。談話室が開いている。『雄大さぁーん!』と大声を上げたが返事はなかった。胸騒ぎがした。走り回る菜美の鼓動が二重の意味で激しくなった。

菜美が雄大夫婦のエリアに飛び込んだとき、雄大は猟銃を手にしていた。多佳子の左の膝から足先に至るまでが血に染まっている。

「来ないで！」と多佳子が目を剥いて言った。

「菜美さん、救急車。このままじゃ危ない」

「はい！」と電話に飛びつく菜美。

「だめ、この女はいや！ あなたが助けて。じゃなきゃ撃って、殺してえ！」

多佳子が歪むほどに昂奮した顔で叫んだ。

雄大はガラス戸を足で蹴って広げ空に向かって猟銃を構えると同時に撃ち放った。銃声が尾を引くようにこだました。

菜美は状況をつかみきれないでいた。

「僕が掛けよう」

雄大に肩を叩かれて菜美は受話器を渡した。

じっと見ていた多佳子がフツと笑って気を失った。

菜美は急いで止血にかかった。交通事故現場で血は見慣れている。また応急の止血法も講習で心得ていた。

顔色はと多佳子を見たときに菜美は何が起こったのかを知った。口紅を付けた多佳子の口元が小さく笑っていた。安らいだ顔だった。思うに多佳子は自分で左脚を撃つことで女の激情を突き付け、極彩色の押し花になったのだ。二度と歩けない損傷に見える。それほどまでにして夫を繋ぎとめたいのか。菜美は戦慄した。

「ええ、僕が女房を撃ちました」

雄大の言葉が菜美をまた驚かせた。

雄大は救急車を呼んだ後で警察に電話をした。

夫を寝盗られ、妻の名を奪われ、実家に戻ったものの未練を断ち切れず、自ら不自由な足を撃って夫の気を引こうとした哀れな女。そう思われたら最後、世間の同情は多佳子に集中し、菜美は悪女の烙印を捺される。多佳子が勝ち誇る顔が目に浮かんだ。雄大は許せなかった。醜いと思った。その気持ちに冷静さを呼んだのだ。硝煙反応を考慮して自分の手で二発目を外に撃ち放った。雄大は、若い女に横恋慕し、古女房を追い出し、帰ってきた処をこもあろうに猟銃で撃つという救いがたい中年男を演じることにしたのだ。それ

はまた、多佳子に絡みつかれ、一生自由になれないだろう自分を唯一解き放つ方途でもあった。女の狡さに負けて女々しく鎖に繋がれる自分はどう見たくもなかった。そのために今度は、進んで犯罪者になろうとしたのだ。

「だめよ、そんなこと」

菜美の目には涙があった。直感でほとんど全てを察しているに違いない。雄大は、菜美とはそういう女だと思った。

「君は後で介抱しただけで見ていた訳じゃない。いいね？」

雄大は菜美を説得した後で、「頭の中では何度も多佳子を殺してたと、独り言のように言った。

そのとき、獣のような叫び声とともに菜美の足がものすごい力で引かれた。体をねじって上を向くと目の前に多佳子の顔があった。目は血走り、血の付いた手で擦ったのか血の赤と口紅の赤で顔が汚れて、この世のものとは思えない形相だった。菜美は声を出す前に頬を殴られた。自分の鼻血が飛ぶのが見えた。多佳子の両掌が菜美の首にかかった。一体重症の多佳子のどこにそんな力があるのか。菜美は顔を真っ赤にしてもがき多佳子を退かそうとした。何か喚いている雄大が見えた。「あんたさえ来なけりゃ」と、絞るような声で何度も繰り返される恐怖。

一方雄大は猟銃の弾を持つてくるとブルブル震えながらそれを装填し多佳子を狙った。速く助けなければという焦りが震えを呼ぶ。撃てなかった。多佳子の下にはもがいている菜美がいる。雄大は思い切り多佳子を蹴った。狂った多佳子には痛みが無いのか、菜美の首を絞める手は離れない。菜美が手当てした多佳子の足から大量の血が流れている。激しい動きに因って腿で止血していた措置が無効になったらしい。菜美の顔が余裕を取り戻した。絞める力が急に弱まったのだ。多佳子の形相だけは変わらない。雄大はやむなく多佳子の顔を強か殴った。転がる多佳子。咳き込む菜美。そのとき散弾が撃たれた。多佳子が畳に張りつき体のあちこちから血が吹いた。二、三度小さく痙攣したように見える。それもつかの間、嘔き出していた血は勢いを失った。心臓が停止したのだ。

菜美は息を引き引き雄大の傍に這っていった。

雄大は撃ったその場でへたり込んでいる。

「聞こえてたんだ」

菜美は「えっ？」という顔をした。声としては出てこない。

「僕の最後の呟きが多佳子を狂わせた」

雄大は頭の中でではなく実際に殺してしまった。理性がそれを肯定している。それもまた自分ながら恐ろしいと思った。

「色あせたデコイの傍に降りてきた綺麗な水鳥、それが菜美さん。」

ハンターが水鳥じゃなくてデコイの方を撃ったからといって、それは水鳥のせいじゃないわよ」

警察で聞いた麗子の言葉が何度も頭に浮かんだ。目の前を乗降客が行き交っている。菜美はあの日多佳子に声を掛けられた駅の待合室に居た。

雄大は現場で、殺人容疑で逮捕された。最初の通報で警官が来たのだ。菜美も事情聴取のため同行を求められ署内で一泊している。その後住所変更をした場合の連絡を条件に帰された。ただ、雄大に黙っているように言われたが、多佳子に首を絞められたこと、雄大がそれを助けようとしたことの二点については積極的に話した。ただ、取調官が鼻先で笑っていたのが気になった。おそらく雇用主の減軽を狙っての虚言と受け取ったのだろう、菜美は、表面的にはただのアルバイトだったのだから。

徹也の車で麗子が警察に来た。何故か二人に不利なことは何も言わなかったらしい。麗子によれば形こそ違え厄介者の二人が居なくなるのは幸いでしかない。事件を複雑にするのは得策でないとの判断だろう、とのことだった。

「誰も悪くないのよ。雄大さんの、ふっきれた穏やかな顔見てたら自然にそう思えちゃった」

別れ間際の麗子の言葉が全てなのかもしれない。菜美もそう考えることにした。

菜美はまた列車に乗らずに見送った。出札口で切符を買おうにも行き先が見つからないのだ。

次の列車まではだいぶ時間がある。もう一度この景色を見ておこう。菜美はそう思って駅舎の前広場に出た。稜線が明瞭な分、空が後ろに落ち込んで、山脈が前に動き出しそうに見えた。深緑色は澄んだ空気のなせる業なのかどうか。近くの雑木林にまで視線を落として初めて少しばかり色づきだした樹々の帯に気付いた。もう見慣れたはずのこの地域の風景画。今日は一段と綺麗に感じた。

刑務所の中も外も人間の中身は同じに見えた。罪深く愚かだった。空の上から見れば内外を隔てる塀そのものが無意味だろう。ただ、人間の背丈のまま塀の中に入れば、外のこの大きな景色が見えない。それだけのようない気がした。

菜美は胸いっぱい息を吸って、その景色に向かって吐き出してみた。なぜか涙が溢れた。

駅舎の方から男が二人足早に近づいてきた、それも笑顔で。

「やっばり君だね、水野菜美」

「ええ、そうです、何か」

年配の一人が警察の身分証を見せて「任意だが一緒に東京まで来てもらえるかな」と言った。

「と、おっしやいますと、何か取調べ？」

「それはちよつと」

「わかりました」と、小さく頷くと真上の空を見上げた。

「身に覚えでもあるのかな」と若い方の男が冷たく言った。

すでに前科は洗い出していると菜美は直感した。

「真っ青できれい。ところで、刑事さん、わたし今度は何の罪なんですか？」

それは自分への問いかけでもあった。

「別に容疑者じゃない。所轄の県警で片付いてはいる」

「それなのに、ですか」

二人の刑事は顔を見合わせて頷きあった。

「或る面倒な筋からの指示だ。ま、官費で旅行でもする気分であつてくれ」

「手持ち少ないので助かります」

これには刑事二人が声に出して笑った。

菜美の頬をかすめて赤とんぼが一匹通り過ぎていった。

「お前はいいね、自由で」

何となくつぶやいてみた。

(完)

